陳舜臣さんを語る会通信

NO.73　Jun.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel.078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年6月20日
http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/

六甲山麓の陳舜臣邸から届けられた名随筆24編『六甲山房記』

【六甲山房】1969年12月、灘区篠原伯母野山3－1－14に家を新築し、生田区山本通4－72－16から転居。庭に母親の思い出に連なる含笑花（がんしょうか）の樹を植える。この木のクリーム色の花は高い香りを放ち、母親がよく髪に挿したりハンカチに包んで持っていたものだ。

新居の室名（家の別名）を、考えたり調べたりしたすえに、土地の名前をとって「六甲山房」とした。司馬遼太郎宅の室名は「冬青居」。冬青はモチ。歴史上の人物の散らばった資料・エピソードを拾い集め、その人物をよみがえらせる歴史小説の仕事は、冬青でイメージされる。中国・南宋のある歴史事実に由来する。電話でこの話をしたら司馬は、「そんな知らんがな。庭にモチがあって好きなだけぞ」と笑ったそうだ。

（ 2001 集英社『陳舜臣中国ライブラリー30』付録「年譜」より ）

【キャッチコピー】作家陳舜臣の室名「六甲山房」。本書はその山房から届けられた、中国・アジアへの深い愛にみちた名随筆集である。桂平、泉州、崇安、酒泉、曲阜、そしてシラーズ、ハッカリ――中国・アジア各地への旅の回想は興味津々たる歴史の探訪へ我々を誘い、自在な詩文の渉猟は美しい楽曲となって心に訴える。思いがけない発見の旅。

単行本は1987年、岩波書店。画像は同時代ライブラリー版（1990 岩波書店）の表紙。（編集委員　橘雄三）

同著「あとがき」より

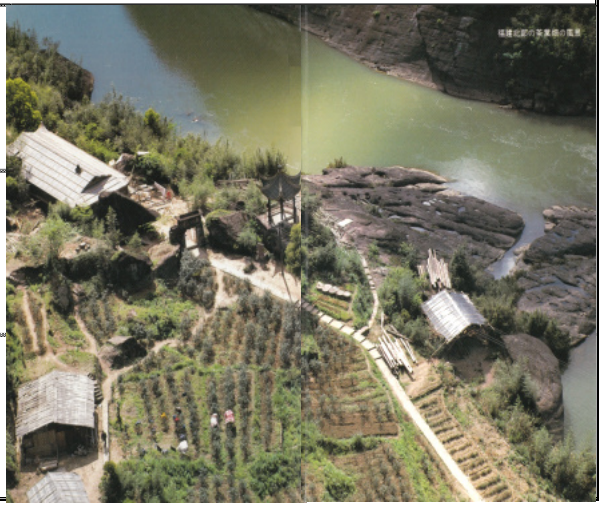
さまざまなときに、さまざまな想いが、脳裏にうかび、そして消えたり残ったり、あるいは薄れたり濃くなったり、ときには形を変えたりする。随筆とは、そのときどきに脳裡から切り取ったものであるとおもう。あくまでも断片でありながら、前後につなぐ流れの音がきこえるのが、随筆の妙味ではないだろうか。

雑誌『世界』に二年間（一九八五年一月号～一九八六年一二月号）連載した随筆を、ここに一冊にまとめてもらった。たとえば曲阜に豪華なホテルができるらしいと書いたが、じつはもうすでに完成して、私の友人が何人も泊ってきた。私たちが歴史の流れのなかに生きていることを、こんなギャップが、かえってあざやかに示してくれる。

テーマを与えられないので、かえって書きにくい面もあった。思いのままに書いたとはいえ、私の脳裡の外に出なかったのはいうまでもない。飛躍しているかにみえるテーマとテーマとの谷間に、それをつなぐ流れがあるはずで、そのささやかな音にしばらく耳を傾けていただきたいとおもう。

一九八七年二月　六甲山房にて
陳舜臣

題名	『六甲山房記』 収録随筆一覧 (1)
桂平まで	1979年、『太平天国』取材旅行の一部、高級国産車で広西の南寧から250km、桂平へ向かう途中におこった「面倒なこと」。本通信No.4の3頁参照 ■『九点煙記』「金田抄」
街路樹の荔枝	桂平の招待所前の街路樹の荔枝から、話は楊貴妃、蘇軾に及び、更には、1939年、日本軍の南寧作戦に及ぶ　　下の画像は福建省北部の茶畑(『六甲山房記』グラビアより)
刺桐城清浄寺	題名の刺桐(しとう)城とは福建省泉州のこと。また、清浄寺は回教寺院。 ■マルコ・ポーロ　蒲寿庚　鄭和 本通信No.2の2, 3頁参照
影の薄いまち	題名のまちは、福建省は武夷山脈に近い崇安のこと。茶葉の産地である。『阿片戦争』にも、茶葉との関連で、このまちを登場させている。■『西廂記』　大紅袍
酒泉伝説	武威、張掖、酒泉、敦煌を河西四郡という。この酒泉という名の由来についての伝説。漢の武帝時代の李広、霍去病両将軍ほか。 ■清末の左宗棠



『六甲山房記』 収録随筆一覧(2)

題 名	内　　容
孔子のまち(一) 孔子のまち(二)	孔子のまちといえば、山東省の曲阜。陳舜臣さんは1980年に曲阜を訪問。孔子について、孔廟、孔府、孔林について、ほか
典礼のこと	典礼問題とは、明末・清の時代、カトリック教の布教に際し、中国人信徒が孔子及び祖先崇拝の諸儀式に参加することの可否を中心として起った論争。■ローマ法王　イエズス会
詩人の墓	イラン南部の都市、シラーズにペルシャの詩人、サァーディーとハーフィズの墓がある。イラク空軍がシラーズを爆撃したというニュースをきき、陳さんは詩人たちの墓を心配する
人工島雑感	神戸の人工島が完成したのは1981年のことである。陳舜臣さんは六甲山房から、この人工島の誕生を埋め立て工事の時から眺めていたのです
景徳鎮盛衰記	「敦煌とならんで、世界的によく知られている中国の中小都市は景徳鎮ではあるまいか」。もちろん、やきもののまちとしてである。やきもののまち景徳鎮盛衰記
逆旅主人	逆旅(げきりょ)とは宿、旅館のこと。この随筆は王維の詩、「元二の安西に使するを送る」で始まる。有名な、「渭城の朝雨　軽塵を浥おす　客舎　青青　柳色新たなり……」です
普陀山記	中国最大の観音霊場は浙江省の舟山列島にある普陀山。開祖は9世紀の日本僧慧萼。開山縁起から、洪武帝、オランダの植民者、紅衛兵らによる破壊まで、その歴史が語られる
梅福から慧萼へ	慧萼(えがく)が観音像を奉じて上陸する以前、この島が梅嶺と呼ばれていたのは、前漢末、梅福という仙人が住んでいたからだという。■『獅子は死なず』「梅福伝」
発丘中郎将	「六甲山房」、陳舜臣邸の住所は伯母野山。ここには伯母野山遺跡があったが、開発至上主義の時代、こわされて学校のグラウンドになってしまった。こんな導入に続き、中国の巨大墓とその盗掘の話に。題名の「発丘中郎将」は曹操が設けた「墓あばき担当大臣」
昆曲	中国の代表的演劇、京劇の歴史はたかだか百年あまりに過ぎない。京劇以前からあった伝統劇の一つ、昆曲の話である。昆曲の昆は、蘇州の近く、昆山(崑山)に由来する
火の休日	二十四節気の一つ清明。春分をすぎ、ようやく、つぎのシーズンの気配が漂ってくる若葉の季節である。人びとは戸外に出る。清明の前二日は火を禁じるという風習があった
海酋林鳳	16世紀後半、フィリピン海域で活躍した海酋(かいしゅう 非合法武装貿易団の首領)林鳳の話。■鄭芝竜、鄭成功
百・千・万ほか	百姓、百歳後(死後の意味)、百代の城、百代の過客、千歳爺、千里馬、千里眼、千金之子(富豪のこと)、万歳爺など大きな数を論考
天の河の石	漢の武帝が張騫に与えた命は、匈奴を挟撃するために、西のかた月氏と軍事同盟を結ぶことにあった。この目的は達成できなかったが、張騫の旅行によって西域の事情があきらかになった。ところで、こんな俗伝がある。張騫は河源をたずねようとイカダに乗り、天の河まで行ってしまい、織女に会い、機を安定させていた石をもらって帰ってきたというのである
蝉が鳴く	『説文』『周書』『史記』『孔子家語』『説苑』『宋史』『本草綱目』『三国志演義』や、唐の李商隠、南宋の陸游、唐の戴叔倫などの詩を引用、蝉を語る
ハッカリの季節	ハッカリは、トルコの東南部、イラクとの国境から百数十キロのところにあるまちで、住民のほとんどがクルド族である。■戦時中の台湾における皇民化運動　「雨夜花」の替え歌
つばき談義	「椿」は中国語では、チュンと発音し、チャンチンのこと。長寿の木とされる。「つばき」は中国語では「山茶」「茶花」。デュマの小説『椿姫』を『巴黎茶花女遺事』という題で、中国語に訳した林紓(りんじょ 1853-1924)に言及
採点	採点といえば答案の採点である。中国でいえば、科挙の答案の採点ということになる。門閥による登用の時代、隋の煬帝が始めた実力本位の人材登用、科挙は大変革であった

「昆曲」
崑山市周荘の古戯台で
演じられる昆劇
編集委員撮影

「詩人の墓」
シラーズにあるサァーディー
の墓廟

『六甲山房記』 いくつかの補足

「ハッカリの季節」 補足(1) 映画より

まず1983年制作の映画「ハッカリの季節(A Season in Hakkari)」を/moviewalker.jp/より紹介します。

この映画は、トルコ共和国の東南隅に位置する山岳地帯ハッカリを舞台に、赴任して来た若い教師と村の人々との触れ合いを描いています。

【ストーリー】

トルコ東南隅の山岳地帯にあるハッカリには、3000メートルを越える山々の渓谷に村落が点在している。クルド系遊牧民族が住むそんな村落の一つに、若い教師が赴任して来た。冬になると雪でうもれて全く外界から隔絶されるこの村には、電気も水道もなく、郵便も来ない。学校に案内された教師は、机も教科書も何もない状態に唖然とする。子供たちはいったいどんな教育を受けているのか？教室が何とか整えられ、教師は子供たちを相手に授業を始めた。

村人たちとも少しずつ知り合い、だんだんと村にも親しみを感じるようになった。村の家庭は完全な家長制度で女たちは重労働を強いられ、全てを容認している。そんな中で村長が三人目の妻を迎えようとしていた。現在の妻は、それを認めようとしない。教師に助けを求めるが、結局、結婚式が盛大に行なわれた。

ある日、子供が病いにかかるが、この村には医者はいない。なすすべがないままに、教師の目の前で死んでゆく。病気は他の子供たちにも感染し、教師は町の役場へ救援を求める手紙を書くが、来てくれる医者がないと断られてしまう。

長い冬が終わろうとするころ、突然に視学官がやって来る。春になったので学校を閉めていいという。雪が解けると村人たちはそれぞれ夏の放牧地へと移住してしまうからだ。教師は子供たちに「私の教えたことは全て忘れてかまわない」という言葉を残して村を去る。

「ハッカリの季節」 補足(2)「雨夜花」の替え歌

陳舜臣さんは国家によって抑圧された人びとに思いを寄せます。「ハッカリの季節」から引用します。

トルコでクルド族を高地トルコ人と呼ばねばならないのも、切実な必要があってのことであろう。東部ではいたるところに、「トルコ人と言えることは、なんとしあわせなことか」という意味のスローガンがかかげられていた。「トルコ人であること」ではなくて、「トルコ人と言えること」となっている点が異様なのだ。

このことから、陳さんは、戦時中、日本による皇民化運動の時代、台湾で歌われた(より正確には「歌わされた」)民謡「雨夜花」の替え歌を連想します。

YouTubeで**一青窈(ひととよう)が歌う「雨夜花」**が聴けます。聴いたことがある節です。

「ハッカリの季節」 補足(3) トルコ･クルド紛争

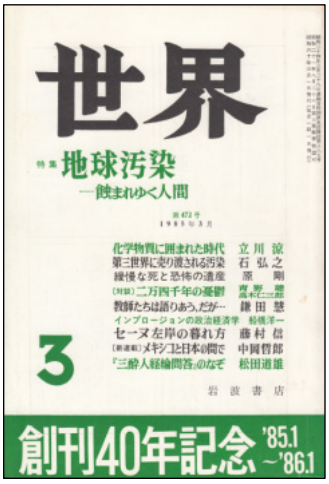
クルド人は、トルコ、イラク、イランなどが国境を接する山岳地帯に居住し、その数、2500万人ともいわれます、オスマン帝国崩壊以来、特に、トルコとの間で、対立・紛争を続けてきました。

フィンランド、スウェーデンのNATO加盟にトルコが反対する根には、このクルド人問題があります。

『世界』一九八五年三月号掲載 「六甲山房記 三 刺桐城清浄寺」

『六甲山房記』は、雑誌『世界』に二年間(一九八五年一月号～一九八六年一二月号)24回連載されました。

ここに取り上げたのは、『世界』の表紙と、その三回目、「六甲山房記 三 刺桐城清浄寺」の誌面です。



六甲山房記
三 刺桐城清浄寺
陳舜臣

左にあげたのは、その最初の頁で、表題の「六甲山房記」だけが毛筆で、大書されていますが、全四頁、途中、挿絵等は一切ありません。ちょっと地味な誌面です。

「六甲山房」伯母野山の陳舜臣邸

陳舜臣さんの転居歴について、本通信第３号にあげた表を簡略化して再掲しました。
本号では、下の表の通し番号11、篠原伯母野山の居宅を紹介いたします。

陳舜臣さんの転居歴

	西暦	年齢	住所(番地は当時の表示)	備　　考	本通信
1	1924	0	元町通7丁目	三越百貨店のそば(白鶴の酒蔵の裏)で生誕	
2	1930	6	中山手通3丁目	華僑が多く「広東村」と呼ばれた一帯	
3	1931	7	北長狭通4丁目	諏訪山小学校2年生	
4	1934	10	海岸通5丁目	「三色の家」のモデルとなった家。父が「泰安公司」創業	No.29
5	1944	20	北野町1丁目	疎開。此の時期、後の奥様と知り合う	No.48
6	1945	21	垂水区御霊町	海岸通の家が消失。北野の家も危うくなり垂水へ転居	
	1946	22	台湾	台北県立新荘初級中学校教師	
	1949	25			
7	1950	26	布引町2－3－19	結婚後の新居、陳家の実家	No.30
8	1951	27	北野町1－17	1952年、長男立人氏誕生	
9	1955	31	北野町1－31	1957年、長女由果氏誕生。 1961年、**「枯草の根」で**江戸川乱歩賞受賞	No.6
10	1965	41	生田区山本通4－72－16	「青玉獅子香炉」で1968年下半期直木賞受賞	No.76
11	1969	45	灘区篠原伯母野山3－1－14	六甲山房と名付けられた六甲山麓の新築住宅に転居	No.73
				1994宝塚歌劇場で倒れ入院　1995阪神淡路大震災	
12	1998	74	東灘区西岡本2―7－2	最後の住居となったマンション	No.13
	2015	90		ご逝去	

画像は神戸松蔭女子学院大学のHPより

■六甲 伯母野山の家

『陳舜臣全集第27巻』（講談社 1988）月報27掲載の陳芳子さん（陳舜臣さんのご長男立人氏御夫人）の文章、「六甲の義父のこと」から抜粋転載します。

義父と義母は神戸の六甲に住んでいます。その家は、神戸港を見下ろし、六甲山へと登る坂の途中にあるのですが、すぐ近くの松蔭女子大学の塔の鐘の音を聴きながら過ごす、六甲の家の夕暮れを、私はすごく気に入っています。私たち（立人と私とふたりのこども）は鎌倉に住んでいて、時々、六甲の家に帰るのですが、義父の家にいると、不安なく、ゆっくりと、おだやかに時が過ぎていくのを感じます。

(上の文中、傍線は編集委員の加筆)

写真を陳舜臣さんのお嬢様、由果様にお見せしたところ、「外壁は少し塗り直されていますがまえのままです。懐かしいです」と、おっしゃいました。「六甲山房」の雰囲気はそのままのようです。

前の坂を下り、左へ折れると、神戸松蔭女子学院大学です。　（編集委員撮影）